

函館商工会議所 令和2年度第3四半期景気動向調査結果

令和3年1月

I 調査要領

- (1) 調査時点及び調査方法 調査票を令和2年12月3日に郵送し、令和3年1月12日を締切日として、FAXで回収
- (2) 調査対象期間 令和2年10月～12月期実績及び令和3年1月～3月期見通し
- (3) 調査対象 函館地域の本所会員事業所371社
- (4) 対象業種 製造業、建設業、卸売業(従業員20人以上)、小売業、サービス業(従業員10人以上)
- (5) 回収率 60.6% (回答数225社)
- (6) 回答企業内訳 製造業63社、建設業39社、卸売業40社、小売業45社、サービス業38社
- (7) 語句の説明 DIとは、ディフュージョン・インデックス(Diffusion Index 景気動向指数)の略で、景気の上向き傾向を表す回答割合(「増加」や「好転」など)から景気の下向き傾向を表す回答割合(「減少」や「悪化」など)を引いた値

II 調査結果概要

令和2年10月～12月期の函館地域の景況は、業況判断DIにおいて、前期比DI値(表内赤字)が前年同期調査時(元年10月～12月期:DI▲5.2)に比べ下降しているほか、次期見通しの今期比DI値(表内緑数字)も、前年同期調査時(2年1月～3月期:DI▲16.0)に比べ大幅に下降していることなどから、総じて、新型コロナウイルス感染症の全国的な再拡大の影響により、一段と厳しい状況にあり、先行きへの懸念も大きく窺われる。

【業況判断】

前期比DIでは、全業種で▲16.7と、前年同期調査時(元年10月～12月期:DI▲5.2)より11.5ポイント下降した。また、次期見通しの今期比DI値も、全業種で▲39.6と、前年同期調査時(2年1月～3月期:DI▲16.0)より23.6ポイント下降した。

【売上】

前年同期比DIでは、全業種で▲38.6と前回調査時(2年7月～9月期:DI▲52.5)より13.9ポイント上昇した。業種別でも、全ての業種で上昇した。

【純利益】

前年同期比DIでは、全業種で▲39.3と前回調査時(2年7月～9月期:DI▲52.1)より12.8ポイント上昇した。業種別でも、全ての業種で上昇した。

【資金繰り】

前期比DIでは、全業種で0.0と、前年同期調査時(元年10月～12月期:DI▲3.4)より3.4ポイント上昇した。一方、次期見通しの今期比DI値は、全業種で▲12.6と前年同期調査時(2年1月～3月期:DI 0.8)より13.4ポイント下降した。

【雇用】

前年同期比DIでは、全業種で▲11.0と前回調査時(2年7月～9月期:DI▲13.8)より2.8ポイント上昇した。一方、従業員過不足DIは、全業種で▲14.7と前回調査時(2年7月～9月期:DI▲12.6)より2.1ポイント下降した。業種別でも、製造業と建設業を除く全ての業種で下降するなど、不足感が強まりつつある結果となった。

【設備投資】

今期の新規設備投資実施企業割合については26.4%で、設備投資目的は依然として「老朽のための更新」が最も多く、次いで「経営多角化・商品多様化設備」、「その他」(新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策等)が挙げられた。次期の新規設備投資実施予定企業割合については、21.0%となった。

【経営上の問題点】

現在最も苦慮している経営上の問題点を業種別でみると、製造業では「売上・受注の不振」、建設業では「受注の不振」、「求人難・人材難」及び「景気の見通し難」、卸売業では「景気の見通し難」、小売業では「売上の不振」、サービス業では「客足の減少」が多く挙げられた。

Ⅲ 要 約

1. 令和2年10月～12月期(今期)実績及び令和3年1月～3月期(次期)見通しについて

(1) 業況判断

今期の業況判断

前期比D I (2年7月～9月期と比べた「好転」-「悪化」企業数構成比)は、全業種で▲16.7と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲5.5)より11.2ポイント下降した。業種別にみても、卸売業を除く全ての業種で下降した。特に、小売業(▲2.5→▲26.7:▲24.2)で顕著となっている。

前年同期比D I (元年10月～12月期と比べた「好転」-「悪化」企業数構成比)では、全業種で▲36.4と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲49.5)より13.1ポイント上昇した。業種別にみても、全ての業種で上昇した。特に、小売業(▲65.0→▲45.2:19.8)で顕著となっている。

また、今期の水準D I は、全業種で▲36.9と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲52.3)より15.4ポイント上昇した。業種別にみても、建設業を除く全ての業種で上昇した。特に、サービス業(▲87.8→▲63.2:24.6)で顕著となっている。

次期見通し

今期比D I (2年10月～12月期と比べた「好転」-「悪化」見通し企業数構成比)は、全業種で▲39.6と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲16.7)より22.9ポイント下降した。業種別にみても、全ての業種で下降した。特に、製造業(▲7.0→▲51.6:▲44.6)で顕著となっている。

前年同期比D I (2年1月～3月期と比べた「好転」-「悪化」見通し企業数構成比)では、全業種で▲40.7と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲46.1)より5.4ポイント上昇した。業種別にみても、サービス業を除く全ての業種で上昇した。特に、小売業(▲55.0→▲44.4:10.6)で顕著となっている。

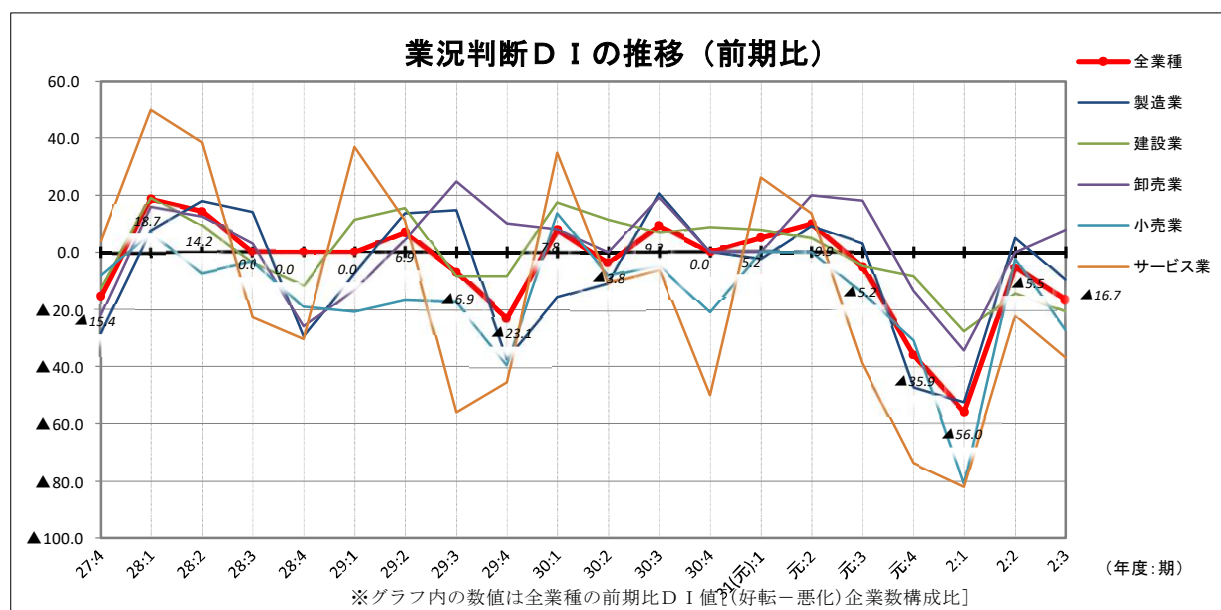


表1 業況判断D I

	今期結果 (2年10月～12月期)			次期見通し (3年1月～3月期)	
	今期の水準D I 2年10月～12月期の業況	前期比D I 2年7月～9月期に比べ	前年同期比D I 元年10月～12月期に比べ	今期比D I 2年10月～12月期に比べ	前年同期比D I 2年1月～3月期に比べ
製造業	▲ 41.0 (▲58.6)	▲ 10.0 (5.2)	▲ 38.1 (▲46.6)	▲ 51.6 (▲7.0)	▲ 43.5 (▲53.4)
建設業	▲ 23.1 (▲16.7)	▲ 20.5 (▲14.3)	▲ 18.4 (▲30.6)	▲ 12.8 (▲11.1)	▲ 28.2 (▲33.3)
卸売業	▲ 5.1 (▲24.4)	7.7 (0.0)	▲ 13.9 (▲24.4)	▲ 12.5 (7.0)	▲ 15.4 (▲15.9)
小売業	▲ 48.9 (▲70.0)	▲ 26.7 (▲2.5)	▲ 45.2 (▲65.0)	▲ 48.9 (▲32.5)	▲ 44.4 (▲55.0)
サービス業	▲ 63.2 (▲87.8)	▲ 36.8 (▲22.0)	▲ 63.2 (▲82.9)	▲ 66.7 (▲45.0)	▲ 72.2 (▲70.7)
全業種	▲ 36.9 (▲52.3)	▲ 16.7 (▲5.5)	▲ 36.4 (▲49.5)	▲ 39.6 (▲16.7)	▲ 40.7 (▲46.1)

(注1) () 内は前回調査時(2年7月～9月期)のD I 値

(注2) 表中の「今期の水準D I」とは、過去との比較ではなく、今期の業況水準を示している

↓
 (「良い」-「悪い」)企業数構成比

(2) 売上の動向

今期の売上の動向

前年同期比D I (元年10月～12月期と比べた「増加」-「減少」企業数構成比)は、全業種で▲38.6と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲52.5)より13.9ポイント上昇した。業種別にみても、全ての業種で上昇した。特に、卸売業(▲37.8→▲18.4:19.4)とサービス業(▲87.8→▲68.4:19.4)で顕著となっている。

前期比D I (2年7月～9月期と比べた「増加」-「減少」企業数構成比)では、全業種で▲13.6と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲6.9)より6.7ポイント下降した。業種別にみても、建設業と卸売業を除く全ての業種で下降した。特に、小売業(2.5→▲33.3:▲35.8)で顕著となっている。

次期見通し

前年同期比D I (2年1月～3月期と比べた「増加」-「減少」見通し企業数構成比)は、全業種で▲40.9と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲47.5)より6.6ポイント上昇した。業種別にみても、建設業とサービス業を除く全ての業種で上昇した。特に、製造業(▲53.4→▲38.7:14.7)で顕著となっている。

今期比D I (2年10月～12月期と比べた「増加」-「減少」見通し企業数構成比)では、全業種で▲38.7と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲17.5)より21.2ポイント下降した。業種別にみても、建設業を除く全ての業種で下降した。特に、製造業(▲10.5→▲50.0:▲39.5)で顕著となっている。

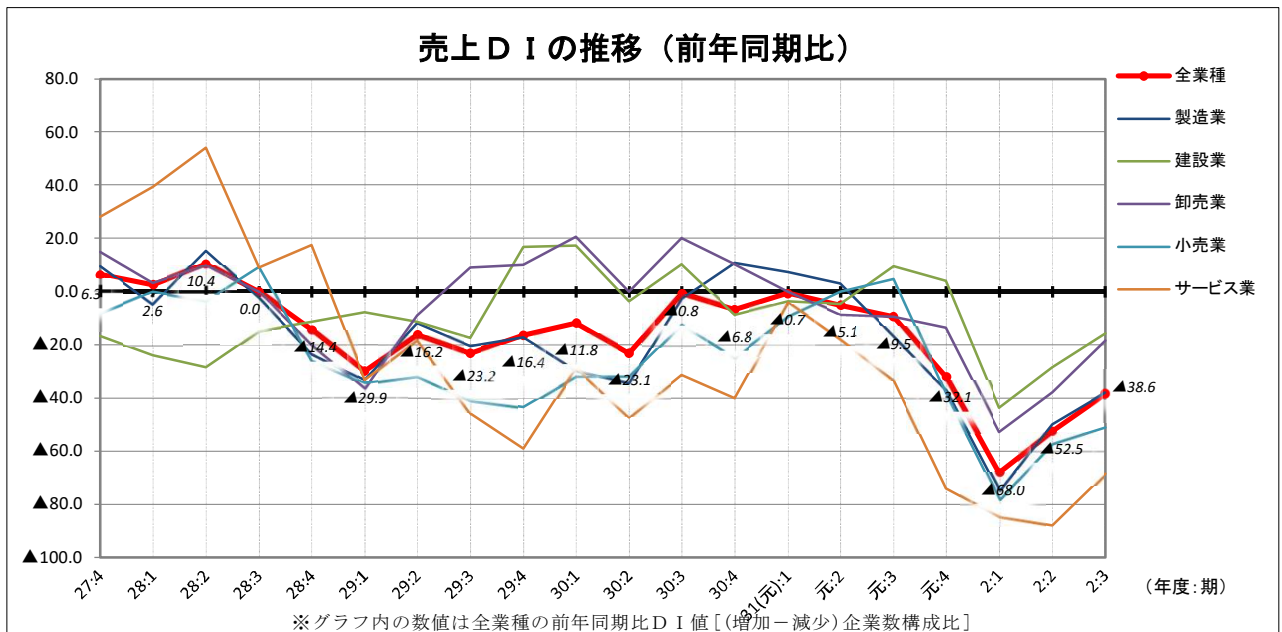


表2 売上D I

	今期結果 (2年10月～12月期)		次期見通し (3年1月～3月期)	
	前期比D I 2年7月～9月期に比べ	前年同期比D I 元年10月～12月期に比べ	今期比D I 2年10月～12月期に比べ	前年同期比D I 2年1月～3月期に比べ
製造業	▲ 5.0 (0.0)	▲ 38.1 (▲50.0)	▲ 50.0 (▲10.5)	▲ 38.7 (▲53.4)
建設業	▲ 5.1 (▲8.3)	▲ 15.8 (▲28.6)	▲ 7.7 (▲11.1)	▲ 33.3 (▲30.6)
卸売業	7.7 (▲4.7)	▲ 18.4 (▲37.8)	▲ 15.0 (4.7)	▲ 23.1 (▲25.0)
小売業	▲ 33.3 (2.5)	▲ 51.2 (▲57.5)	▲ 48.9 (▲30.0)	▲ 40.9 (▲55.0)
サービス業	▲ 34.2 (▲26.8)	▲ 68.4 (▲87.8)	▲ 66.7 (▲43.9)	▲ 72.2 (▲70.7)
全業種	▲ 13.6 (▲6.9)	▲ 38.6 (▲52.5)	▲ 38.7 (▲17.5)	▲ 40.9 (▲47.5)

(注1) () 内は前回調査時(2年7月～9月期)のD I 値

(3) 純利益の動向

今期の純利益の動向

前年同期比D I (元年10月～12月期と比べた「増加」-「減少」企業数構成比)は、全業種で▲39.3と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲52.1)より12.8ポイント上昇した。業種別にみても、全ての業種で上昇した。特に、卸売業(▲28.9→▲10.8:18.1)で顕著となっている。

前期比D I (2年7月～9月期と比べた「増加」-「減少」企業数構成比)では、全業種で▲18.6と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲13.3)より5.3ポイント下降した。業種別にみると、製造業、建設業及び卸売業で上昇したものの、小売業とサービス業で下降した。

また、今期の水準D Iは、全業種で▲6.4と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲13.4)より7.0ポイント上昇した。業種別にみても、建設業を除く全ての業種で上昇した。特に、製造業(▲21.8→0.0:21.8)で顕著となっている。なお、建設業と卸売業でプラスを示しているものの、小売業とサービス業で大幅なマイナスを示しており、「赤字」と答えた企業が「黒字」と答えた企業を上回る結果となった。

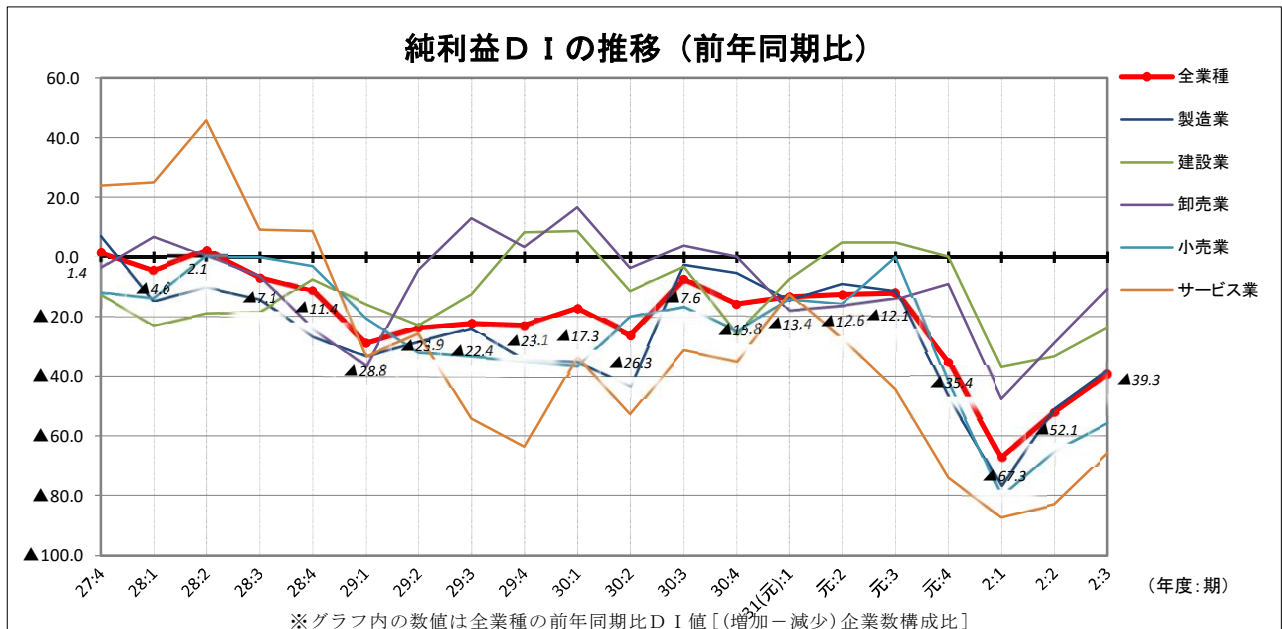


表3 純利益D I

	今期結果 (2年10月～12月期)		
	今期水準D I 2年10月～12月期の業況	前期比D I 2年7月～9月期に比べ	前年同期比D I 元年10月～12月期に比べ
製造業	0.0 (▲21.8)	▲13.3 (▲13.8)	▲38.1 (▲50.9)
建設業	17.9 (22.2)	▲12.8 (▲13.9)	▲23.7 (▲33.3)
卸売業	24.3 (18.2)	7.7 (2.3)	▲10.8 (▲28.9)
小売業	▲20.0 (▲22.5)	▲37.8 (▲10.3)	▲55.8 (▲65.0)
サービス業	▲56.8 (▲58.5)	▲36.8 (▲31.7)	▲65.8 (▲82.9)
全業種	▲6.4 (▲13.4)	▲18.6 (▲13.3)	▲39.3 (▲52.1)

(注1) () 内は前回調査時(2年7月～9月期)のD I 値

(注2) 表中の今期水準D I とは、過去との比較ではなく、今期の業況水準を示している

↓

(「黒字」-「赤字」)企業数構成比

(4) 資金繰りの動向

今期の資金繰りの動向

前期比D I (2年7月～9月期と比べた「好転」－「悪化」企業数構成比)は、全業種で0.0と前回調査時(2年7月～9月期:D I 1.8)より1.8ポイント下降した。業種別にみると、建設業で横ばい、卸売業とサービス業で上昇したものの、製造業と小売業で下降した。

前年同期比D I (元年10月～12月期と比べた「好転」－「悪化」企業数構成比)では、全業種で▲5.0と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲16.1)より11.1ポイント上昇した。業種別にみても、全ての業種で上昇した。特に、製造業(▲10.3→7.9:18.2)で顕著となっている。

次期見通し

今期比D I (2年10月～12月期と比べた「好転」－「悪化」見通し企業数構成比)は、全業種で▲12.6と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲12.8)より0.2ポイント上昇した。業種別にみても、製造業と小売業を除く全ての業種で上昇した。特に、卸売業(7.0→23.1:16.1)で顕著となっている。

前年同期比D I (2年1月～3月期と比べた「好転」－「悪化」見通し企業数構成比)では、全業種で▲15.0と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲23.4)より8.4ポイント上昇した。業種別にみても、全ての業種で上昇した。特に、卸売業(4.7→25.6:20.9)で顕著となっている。

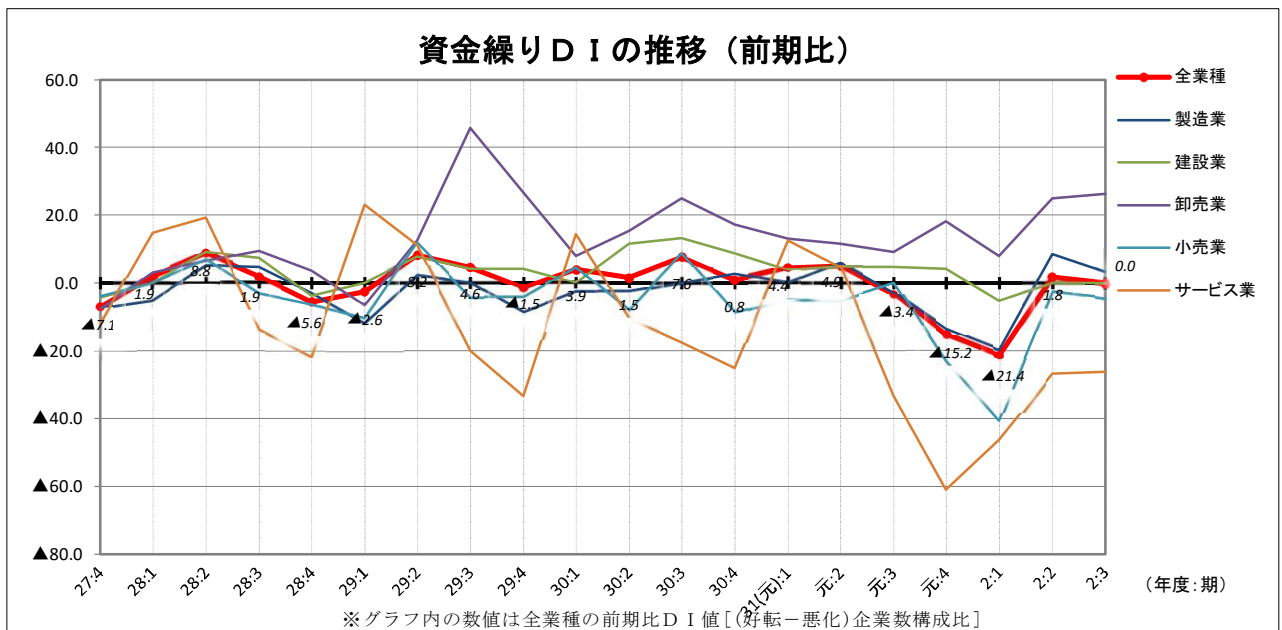


表4 資金繰りD I

	今期結果 (2年10月～12月期)		次期見通し (3年1月～3月期)	
	前期比D I 2年7月～9月期に比べ	前年同期比D I 元年10月～12月期に比べ	今期比D I 2年10月～12月期に比べ	前年同期比D I 2年1月～3月期に比べ
製造業	3.2 (8.6)	7.9 (▲10.3)	▲11.1 (▲3.4)	▲14.3 (▲17.2)
建設業	0.0 (0.0)	0.0 (▲8.6)	0.0 (▲2.8)	▲7.9 (▲13.9)
卸売業	26.3 (25.0)	27.0 (15.9)	23.1 (7.0)	25.6 (4.7)
小売業	▲4.4 (▲2.5)	▲20.9 (▲25.0)	▲28.9 (▲20.0)	▲29.5 (▲30.0)
サービス業	▲26.3 (▲26.8)	▲45.9 (▲56.1)	▲47.2 (▲48.8)	▲50.0 (▲63.4)
全業種	0.0 (1.8)	▲5.0 (▲16.1)	▲12.6 (▲12.8)	▲15.0 (▲23.4)

(注1) () 内は前回調査時(2年7月～9月期)のD I値

(5) 雇用の動向

今期の従業員数

前年同期比D I (元年10月～12月期と比べた「増加」－「減少」企業数構成比)は、全業種で▲11.0と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲13.8)より2.8ポイント上昇した。業種別にみても、小売業で横ばい、サービス業で下降したのを除き、全ての業種で上昇した。特に、卸売業(6.5→26.3:19.8)で顕著となっている。

前期比D I (2年7月～9月期と比べた「増加」－「減少」企業数構成比)では、全業種で0.0と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲5.5)より5.5ポイント上昇した。業種別にみると、建設業、小売業及びサービス業で下降したものの、製造業と卸売業で上昇した。

また、従業員過不足D Iは、全業種で▲14.7と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲12.6)より2.1ポイント下降した。業種別にみても、製造業と建設業を除く全ての業種で下降した。特に、サービス業(▲2.4→▲13.5:▲11.1)で顕著となっている。

次期見通し

前年同期比D I (2年1月～3月期と比べた「増加」－「減少」見通し企業数構成比)は、全業種で▲8.1と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲15.7)より7.6ポイント上昇した。

今期比D I (2年10月～12月期と比べた「増加」－「減少」見通し企業数構成比)では、全業種で▲4.1と前回調査時(2年7月～9月期:D I ▲0.5)より3.6ポイント下降した。

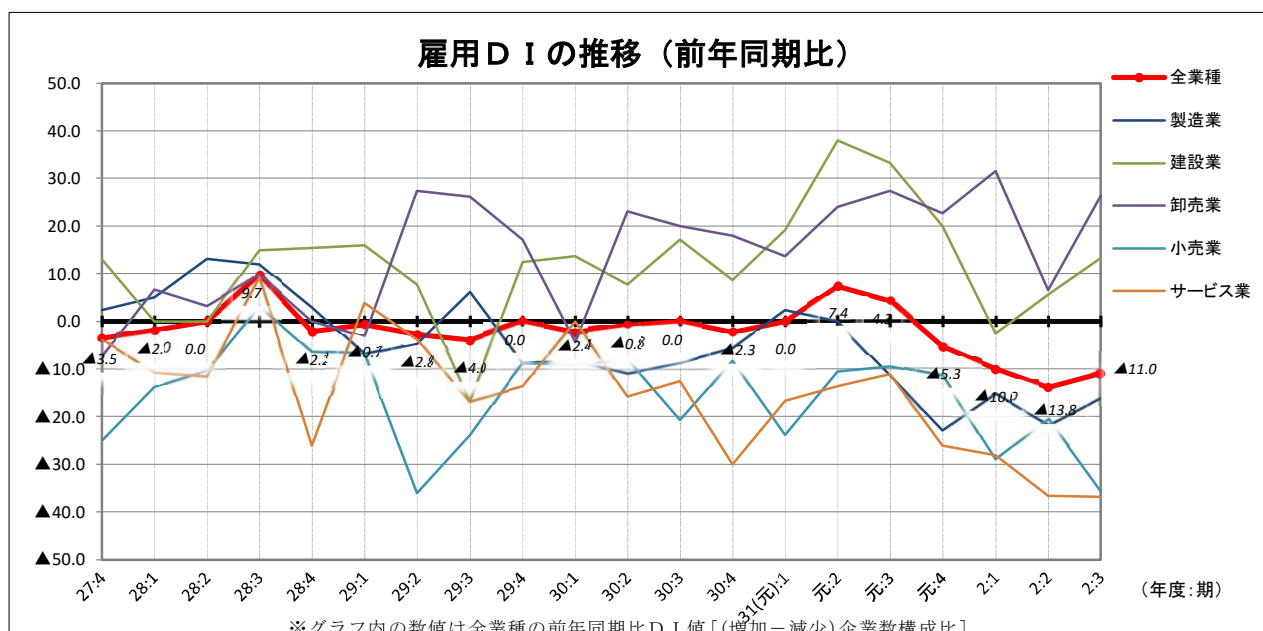


表5 雇用D I

	今期結果 (2年10月～12月期)			次期見通し (3年1月～3月期)		
	従業員過不足D I 2年10月～12月期の業況	前期比D I	前年同期比D I	今期比D I	前年同期比D I	
		2年7月～9月期に比べ	元年10月～12月期に比べ	2年10月～12月期に比べ	2年1月～3月期に比べ	
製造業	▲ 15.0 (▲17.9)	▲ 1.6 (▲14.0)	▲ 16.1 (▲21.8)	▲ 6.5 (▲1.8)	▲ 11.3 (▲19.3)	
建設業	▲ 43.6 (▲52.8)	2.6 (2.8)	13.2 (5.6)	▲ 2.6 (2.8)	▲ 5.3 (▲2.8)	
卸売業	7.9 (9.3)	30.8 (8.7)	26.3 (6.5)	25.0 (19.6)	27.5 (11.1)	
小売業	▲ 9.3 (▲2.6)	▲ 9.1 (▲7.7)	0.0 (0.0)	▲ 20.5 (▲7.7)	▲ 24.4 (▲23.7)	
サービス業	▲ 13.5 (▲2.4)	▲ 21.1 (▲14.6)	▲ 36.8 (▲36.6)	▲ 13.9 (▲17.1)	▲ 25.0 (▲43.9)	
全業種	▲ 14.7 (▲12.6)	0.0 (▲5.5)	▲ 11.0 (▲13.8)	▲ 4.1 (▲0.5)	▲ 8.1 (▲15.7)	

(注1) () 内は前回調査時(2年7月～9月期)のD I 値

(注2) 表中の従業員過不足D I とは、過去との比較ではなく、今期の業況水準を示している

(「過剰」－「不足」)企業数構成比

2. 今期および次期の新規設備投資について

今期(2年10月～12月期)の新規設備投資実施企業割合は、全業種で26.4%と前回調査時(2年7月～9月期:27.3%)より0.9%下降している。設備投資目的では、依然として「③老朽のための更新」が最も多く49.1%、次いで15.8%で「②経営多角化・商品多様化設備」、「⑤その他」(新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策等)が続いている。また、実施企業の割合を業種別にみると、卸売業が最も多く(50.0%)、次いで製造業(26.2%)、小売業(22.2%)、サービス業(16.7%)、建設業(15.8%)と続いている。

次期(3年1月～3月期)の新規設備投資実施予定企業割合は、全業種で21.0%と前回調査時(2年7月～9月期:24.5%)より3.5%下降している。設備投資目的では、今期と同様に「③老朽のための更新」が47.4%と最も多く、次いで21.1%で「②経営多角化・商品多様化設備」となっている。

表6 新規設備投資実施企業割合および目的

	実施企業の割合	新規設備投資目的				
		①売上増加に伴う増設	②経営多角化・商品多様化設備	③老朽のための更新	④省力化・コストダウン設備	⑤その他
製造業	26.2	14.3	23.8	42.9	9.5	9.5
	(36.4)	(0.0)	(25.0)	(50.0)	(17.9)	(7.1)
	22.0	6.3	37.5	31.3	6.3	18.8
建設業	15.8	0.0	0.0	71.4	14.3	14.3
	(20.0)	(0.0)	(0.0)	(62.5)	(37.5)	(0.0)
	10.5	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0
卸売業	50.0	9.1	18.2	45.5	27.3	0.0
	(43.5)	(22.2)	(22.2)	(22.2)	(22.2)	(11.1)
	41.0	14.3	14.3	57.1	14.3	0.0
小売業	22.2	0.0	9.1	36.4	9.1	45.5
	(20.5)	(0.0)	(10.0)	(60.0)	(20.0)	(10.0)
	13.6	0.0	0.0	57.1	14.3	28.6
サービス業	16.7	0.0	14.3	71.4	0.0	14.3
	(9.8)	(0.0)	(20.0)	(60.0)	(20.0)	(0.0)
	17.6	0.0	0.0	83.3	16.7	0.0
全業種	26.4	7.0	15.8	49.1	12.3	15.8
	(27.3)	(3.3)	(18.3)	(50.0)	(21.7)	(6.7)
	21.0	5.3	21.1	47.4	13.2	13.2

(注) 上段は今期、下段は次期、()内は前回調査時(2年7月～9月期)の割合
設備投資目的は複数回答あり

3. 経営上の問題点について

現在最も苦慮している経営上の問題点を業種別でみると、製造業では「売上・受注の不振」(42.9%)、建設業では「受注の不振」、「求人難・人材難」、「景気の見通し難」(共に28.6%)、卸売業では「景気の見通し難」(32.1%)、小売業では「売上不振」(42.9%)、サービス業では「客足の減少」(41.7%)が一番の問題点として挙げられている。

【単位：％】

